

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

私の夢と大切な水

宮崎県

延岡市立恒富中学校

三年

永谷

和希

私は将来、和牛繁殖農家になろうと思っている。繁殖農家の仕事は母牛の世話をして、良い子牛を産ませ市場に出荷することだ。良い和牛を育て、和牛のオリンピックに出場すること、品評会に参加して良い成績を取ることも私の夢である。私がこの様に考えるのは、祖父の影響が大きい。私の家は、稲作と和牛の繁殖農家をしていて、現在も五頭の母牛と三頭の子牛を飼育している。私自身も幼いころから祖父の手伝いをしてきた。祖父の育てた子牛は百万円以上の値をつけたこともあり、いつか祖父を超える繁殖農家になることが私の目標である。良い牛を育てるために大切なのは、日々の餌やり、手入れ、良い健康状態を保つことだと思っている。私の家では、地下四十三メートルから地下水を引き、除去装置を使つてろ過した軟水を、家族も牛も飲んでる。この水と、それを利用して育てた米や野菜のお陰か、私自身も大変健康で、小学校・中学校を通して、無遅刻、無欠席で過ごせている。人間同様、牛にとつても、良い水と安全な餌が大切なことは言うまでもない。特に、牛はしゃべることができないから、人間が良い水と餌を選んで与えることが大切になってくる。牛の餌は牧草と稲わらだ。稲わらは、もちろん田植えをして米を育て、収穫した後のわらである。米や牧草を育てるためにも、安全な水は欠かせない。また、日光や雨も農業にとっては必要不可欠のものである。まさに水は植物・動物の命の源だと思つた。

水の循環について学び、調べてみると、地球上の水の総量は、およそ四十億年前からはほとんど変わっていないという。日本は豊かな水資源に恵まれていて、蛇口を開けば安全な水が出てくるのが当たり前だが、これは決して世界の常識ではないことを忘れてはいけない。日本人は飲食・入浴・洗濯・水洗トイレなどで、一人当たり一日約二百九十リットルもの水を使っているそうである。その一方で、世界では約七億人の人々が生きていくために必要最低限の三リットルの水すら手に入らず苦しん

でいるという。さらに調べると、実は、日本は国土が狭く人口が多いため、国民一人当たりの水資源量は世界平均の二分の一程度しかなかった。この現実をしつかり受け止め、私たちは、水の大切さをもう一度考え直さなければならぬ。無駄をはぶく意識もしつかり持って生活しなければいけないと思う。私たちが使った水が循環し、世界のどこかの人のための水になると思うと、水をきれいな状態で循環させることも考えなければいけないだろう。

私の通う学校では、通学中のごみ拾い運動を行っている。小さな活動だが、もし日本中の中学生がこの活動をして、一人一つのごみを拾うだけでも、一日約三百二十二万個のごみがなくなることになる。毎日行えば、その三百六十五倍だ。小さな活動も、決して小さなことではなく、と思う。歯磨きの時に水を流しっぱなしにしないことも同じだろう。日本中の家庭が、生活用水の節水を行ったり、生活排水を少しでも減らし、きれいにする努力を行ったりすることの大切さをあらためて考えさせられる。今、プラスチック製品の減量が進められ、私たち中学生でも買い物にマイバックを持参するようになった。水を守るためには、水だけでなく、空気や土壌も守らなければならない。それは、自然環境のすべてが連鎖しているからだ。

和牛繁殖農家になるという夢の実現のためにも、私は環境問題に興味を持ち続け、水を守るために自分にできる小さなことをやり続けようと思っている。将来、私が育てる牛も、おいしい井戸水で健康に育ってほしい。五年に一度の和牛オリンピックで、前回は鹿児島県に総合優勝を奪われたが、「宮崎牛」がずっと日本一を守り続けられるように頑張りたい。

厚生労働大臣賞（優秀賞）

『エコ』の意義

兵庫県 兵庫教育大学附属中学校 二年 小寺 良菜

友人と電話で話していた時のことだ。去年から全世界にはやりだしたコロナについて、お互いにぐちづっていたのだが、

「でも、コロナがはやって良かったなと思う事もあるよ。」
と友人が言い出した。

「それは何？」

と尋ねると

「お母さんが水の使い方に関する言わなくなった事。」

と言う。友人の母親は、日頃から水の使い方についてとても細かく、ことあるたびに『エコ』を連発するそうだ。

「夏の暑い日、部活から帰ってきて、汗まみれの体をたっぷりのシャワーで洗い流したいなって思っても、水を使い過ぎるからダメって言われるんだ。」

彼女は以前からよく言っていた。だが、それがコロナとどうつながるのか。

「コロナがはやったおかげで、市町村の特別措置で、六ヶ月間、水道代が無料なんだ。だからどんなに水を使ってもタダ。それでお母さん、あまりうるさく言わなくなったんだ。」

なるほど、納得だ。無料ならいくら使っても文句を言う人はいない。「良かったね。」

そう言って電話を切った。

それなのに、なぜかすっきりしない。モヤモヤした気持ちをかかえたまま、お母さんにその話をした。するとお母さんは言った。

「そうねえ、私も家計をやりくりしているからそのお母さんの気持ちはよく分かるわ。でも、一歩下がって、もう少し大きな視野で考えてみると、自分の家計に影響がないからよし、とするのは違うかな。地球規模で考えたら、資源には限りがある。だから、『エコ』は自分の家計の支出

をおさえるためだけのものではなく、地球の資源を、ひいては私たちの未来を守るために必要なことだと言えるわね。それに気付くことができれば、水道代が無料になるうとなかろうと、やることは同じなのではないかな。」

ああ、それだ。私のモヤモヤの原因は。私は学校で資源に限りがあると習った。それは水だけではない。石油も、土地も、木材も、何もかもだ。私たちは地球という限られた枠の中で生活している。そこに存在できる物の量は決まっている。それらの資源は、私たち人間だけではなく、地球上に生きる全てのものたちと共に分かち合っていかなければならない。大切な資源を守っていくために、私にできる事は何だろう。中学生である私たちには、経験や知識も財産もない。地球の資源を守りぬくなんて、そんな大きな事を言えるわけがない。でも、それでもできる事がある。それが『エコ』だ。必要以上に使わない。大切に使う。無駄にしない。その小さな一つ一つの行動が、今の私たちにできる最大の資源を守るための行動だ。

きっかけは「水道代が高いからもっと水を使う量を減らそう」で良いのだと思う。実際に、それが一番手っ取り早く、水の無駄遣いを減らす行動につながるのではないか。人は自分の利益に関わることには、とてもびん感だ。常に意識し、継続的に行動することもできる。でもそれだけでは足りない。『エコ』は、個人の利益のためだけではなく、地球を守るための行動でもあるという事を、どこか心の片隅に置いておかなければならない。今のところ私たちは地球以外では生きていけない。すなわち、私たちの運命は地球と共にあるという事だ。地球が減びると私たちが滅びる。地球がいつまでも水資源の豊かな星であるという事は、私たちが生きていく上でかけがえのない利益につながっていく事はあきらかなのだから。

農林水産大臣賞（優秀賞）

豊かな暮らしをいつまでも

香川県

高松市立香川第一中学校

二年

溝淵

朔也

僕は野球の練習の時に、冷たい水を飲む。一気にのどが潤されて元気が湧く。そして家に帰ってまっ先に向かうのがシャワーだ。暑い夏、やや冷たいシャワーを頭からかぶる。ほてった体が一気に冷やされて、最高に気持ちが良い。

また、僕は自転車に乗る事が好きだ。学校周辺を走るだけでも、二、三個ため池を見る。十分程走るとまた次のため池が見える。日本で一番狭い県なのに、なぜこんなにもため池が多いのだろうか。どうしてこんなにため池が必要なのだろうか、ずっと不思議に思っていたので調べてみることにした。

僕が住んでいる香川県は、全国に比べて降水量がとても少ない県だ。昔から水不足に悩まされていて、雨が全く降らず日照り続きだったため、田んぼはひび割れていた。その上、川が短く急なため、せつかく雨が降ってもすぐ海に流れてしまう。そこで、一時的に水をためておけるため池が必要だった。県内のため池はとて多く、全国第三位。その数はおよそ一万二千箇所もあり、まさにため池王国だ。香川用水ができた今でも、農業用水の五十二パーセントをため池などに頼っているそうだ。

僕が通っていた浅野小学校では、毎年「ひょうげフェスタ」と呼ばれる行事がある。江戸時代に、香川県のほとんどのため池に携わったといわれている「矢延平六」さんをしのび、感謝するお祭りだ。

となりの川東にある「新池」は平六さんが作ったため池の一つだ。川東は土地が高いため、浅野全体に水が行き渡り、米や野菜、果物がよく育つようになった。ため池作りの中で一番苦労するのが、地面や堤防を固める事だ。僕も小学四年生の時に体験したが、機械がなかった時代に石や杵を使って地面を固めるのが、とても重く、少ししただけで僕は汗だくになってしまった。十一年もかけて新池を作り上げた当時の大変さを実感した。

台風が来たり、大雨が降ったりして池の水位が上がった時には、毎回のように堤防が切れ、修理をした。その度に堤防を更に強くし、ほんらんを少なくしたのだった。

今でも昔の伝統を受け継ぎ、浅野では、米の豊作を願う「ひょうげ祭り」が行われる。顔に色とりどりの化粧をして、新池まで練り歩き、最後には、神輿ごと新池に飛び込んでファイナーレを迎える。そこで、初めて見た光景に僕は驚いた。

新池に巨大なソーラーパネルがたくさん設置されていて、太陽光発電もしているのだ。家の屋根や、山の斜面に設置されているのはよく見ることが、池に浮かべると、色々なメリットがあるらしい。

木の伐採が無く、緑を残せるし、平らな水面にソーラーパネルを浮かべるだけなので、とても簡単だ。それに地震にも強そうだ。

新池の水面で、太陽の恵みと人の知恵を借りて電気を作り出せるなんて、すごい事だと思った。それもさかのぼれば、平六さんが苦労して作り上げたため池のおかげだ。

新池について深く調べてみると、矢延平六さんを含め浅野の水不足解消に携わった人達の苦労や工夫がよく分かった。だからこそ、水を一滴も無駄にしないという事を常に心掛け、「節水」に努めていくとともに、水への感謝の気持ちがいっそう強くなった。

今の僕にできるのは、この平六さんの偉業を次の世代に受け継ぎ、いつまでもきれいな水が飲め、おいしいお米や野菜が食べられる今を未来へ届けることだと思う。そのためには、池や川、海などの自然を汚さず、美しさを保てるように、今ままであまり興味なかった地域の清掃活動にも積極的に参加してみようと思う。

僕は今日も、野球の練習の時に水を飲む。今日の水は、いつもより一段とおいしく感じた。

経済産業大臣賞（優秀賞）

父と私をつなぐ水

福島県 会津若松市立一箕中学校 三年 佐藤 空成

「水」と聞いて私が真っ先に思い浮かべるのは、父の存在だ。

今の日本は蛇口をひねるだけで、安全でおいしい水が出てくるのが当たり前だ。しかし、世界では、安全な水が手に入らない国の方が多いと言われている。だからこそ、私達は水を大切に、そして、感謝しなければならぬものだ。と知っているはずだ。しかし、私にはもう一つ知ってほしいことがある。それが、私の父の存在だ。

私の父は、福島県の大川ダムで働いている。大川ダムでは、災害を防ぎ、私達の生活に欠かせない飲み水や、農業用水を蓄えている。他にも、水力発電を行い、私の住む会津若松市や、東北、東京にも電気を送っている。私の父は、

「皆にとつてなくてはならない仕事なんだ。」と、教えてくれた。父は自分の仕事にやりがいを感じ、責任をもって仕事をしている様子を、その時強く感じた。そんな仕事をする父を、私は誇りに思う。しかし、たった一度だけ、父が働く理由が分からなくなってしまったときがあった。

二〇一九年、十月十二日、台風十九号が、日本列島を直撃し、日本に甚大な被害をもたらしたことを、覚えているだろうか。その時、福島県は、大雨特別警報が発表され、雨が地面を叩き付ける音が響き、木が倒れてしまいそうなくらいの強風が吹いていた。そんな中、父は大雨で川が氾濫しないよう、ダムへ向かった。こんな時に出かける父を見送って、私は不安で押し潰されそうだった。父が留守の今、長男である自分が家族を守らなくてはいけないと分かっていて、分かってはいたが、心の中では父が私のそばにいてくれたら、どんなに安心だろうななどと思っていた。父が皆のためにしている仕事を、皆は知っているのだろうか。父は大丈夫だろうかと心配で仕方がなかった。しかし、いつでも避難ができるよう、準備をするために歯磨きをしようと思った。歯磨きをするために蛇

口をひねった。いつもと何一つ変わらない水、そう思っていたが、そのときは何かが違うような気がした。私はすぐに、それが何か分かった。同時に、なぜ今まで気付かなかったのだろう、とも思った。蛇口から出てくる水は、ずっと私と父をつないでくれていたのだ。父が私達のためにダムに蓄えて置いてくれた水が、蛇口をひねること、私のもとへ届く、そう気付いたとき、私は一人ではないと思えた。今、父は私達の命を守るために必死に働いてくれている。ならば、私も何かしなければならぬ、そう思い、力強く蛇口をしめた。

それから、何度も何度も、記録的な大雨が日本を襲った。その度に、父は休みであろうと、仕事へ向かう。そして、私はその度に、父を尊敬する。

私にとって水は、父の思いやりが詰まった大切なものだ。それは、私だけではなく、日本国民全員に共通することだと思ふ。だからこそ、水を無駄にはしていないのだ。ただの水かもしれないが、そのただの水には、ダムや浄水場などで働く人達の思いやりや願いが込められている。そのことを、私はもつと多くの人に知ってほしい。今まで私は、水を大切に扱い、感謝してきた。それ以上、自分にできることは何もないと、勝手に決めつけていた。しかし、今の私は、中学生の私だからこそできることに気づかされた。それは、水に感謝できるのは、誰かの努力があるからだということ、水を大切にできるのも、誰かが大切にできるような存在の水にしてくれたからだということ、この作文を通して、いろいろな人に発信していくことだ。

新型コロナウイルスから日常を取り戻すために、これからも水で手を洗おう。そうすれば、明るい未来がやって来るだろう。大雨の後、空に大きな大きな虹が架かるように。

国土交通大臣賞（優秀賞）

「共助」の遺産

沖繩県 粟国村立粟国中学校 三年 小谷 杏奈

「このトゥーヅに溜めた雨水を飲んで衛生的には大丈夫だったんですか？」「このような大きな石をどこから持ってきたんですか？」
観光客が質問してきます。しかし、私はきちんと答え返すことができず、活動を開始しました。中学生で島のボランティアガイドをしよう！そうして、活動をスタートさせた私達。中学生の目線で、島のエピソードを集め、ありのままに島をガイドすることにしました。そのエピソードの一つが、島の文化遺産とも言えるトゥーヅについての紹介をするこ

とです。
「このトゥーヅは、水道がない頃に、雨水を溜めて使っていた入れ物です。現在でも粟国島にはこのトゥーヅが残っている家が多いです。トゥーヅについての歴史を調べていくと水道がない時代の島の苦勞を知ることが出来ます。今では、きれいな水草を活けたりして、庭のちよつとしたアートになっていたり、溜めた水を庭の草花への水やりに使ったりしています。」

このように説明していた私たち中学生ボランティアガイドの誰もが、改めて島の水の歴史について、何も分かっていなかったことを思い知らされました。

私は初めて祖母に聞きました。祖母の幼少期の体験は、今の私の生活から想像もできないものでした。

「近くの溜め池から水を汲み、一斗缶（18ℓ）に入れ、家まで運んでくるのが毎日だった。」「片道20分の道をトゥーヅが満杯になるまで何回も往復した。」「お風呂は毎日入れない。貴重な水だから毎日のお風呂に使うのはもったいない。」「雨が降ったら外に出て髪を洗った。」「夏は海で体を洗った。」

自分達の住んでいる粟国島が、昔から水資源に恵まれず、島民たちは水を確保するためにとても苦勞してきたことを祖母は語ってくれました。生活を支えるために、一日一日に必要な水を汲み、運んでいた祖母の必死な様子が伝わってきます。

「トゥーヅ」は水を溜める容器のことです。丸みを帯びていて巨大

なお茶碗のように見えます。島の西海岸にある凝灰岩をくり抜いて造られ、大きいものでは約1トンもあつたそうです。その重い石を運ぶために島の大人たちが数十人集まり交替しながら、船も使い、約七〇人を超える人手が必要なこともありました。多くの人の苦勞と時間をかけて運び造られたトゥーヅは、大切な財産として親から子へ代々受け継がれ、今もなお島のあちこちの庭先で見ることが出来ます。トゥーヅは島民が力を合わせて造った、水資源を確保するための大切な容器だったのです。

今、世界はコロナパンデミックをどのように乗り越えていけばいいのか、大きな課題と向き合っています。感染を防ぐために、手洗いの徹底など、衛生面の予防対策も必要です。しかし、世界人口の約10人中3人の割合で、安全な水の確保が難しく、手洗いの水以前の問題の方が深刻です。汚れた水が原因で命を落とす子どもたちもいるのです。かつての祖母のように、今でも世界では、幼い子どもたちが手に入るかわからない水を求めて歩き続けている状況があります。私の住む粟国島の先人達は、厳しい島の自然条件や生活環境の中でも、お互い助け合ってコミュニティを築いてきました。それを象徴しているのがトゥーヅづくりだと思えます。一つ一つが重くて巨大なトゥーヅは一人でつくることは困難でした。多くの人々の協力がないとできないことだったのです。

自分一人だけの安全や安定だけを求めず、水資源を確保するために、「共助」の心を持つて先人達が造り上げてきた「トゥーヅ」。私達がこれからの時代を生き抜くための大切なメッセージを伝えていきます。

環境大臣賞（優秀賞）

私達が担うべき使命

新潟県

新潟県立燕中等教育学校

三年

羽賀

詩彩

「この水道水は飲めるの」と、オーストラリアから我が家にホームステイにやってきた学生に尋ねられた。

「うん、飲めるよ」と答えると、彼は目を丸くして驚いていた。そして、コップに水を汲み、おいしそうに飲み干していた。

彼は、水道水をペットボトルに入れる時も慎重だった。水をうんと細くして、ゆつくりと注いでいた。オーストラリアでは、水は貴重なもので、飲料用にはペットボトルで買ったものを飲んでいるそうだった。それだけに、水はとても大切なものだという意識が強くあったのだろう。当時の私は、蛇口をひねり、水道水を飲むということが当たり前だと思っていたし、逆に水道から自由に水が飲めない国があることを知らなかった。だから、水道水が飲めるかということを確認した彼を、不思議に感じたのだ。この驚きの経験をして以来、私は世界の水事情について関心をもつようになった。

SDGsの六番目の目標は、「安全な水とトイレを世界中に」というものだ。この目標の背景には、世界中に安全な水を使うことができなかったり、安全に管理されたトイレを使わずに生活したりしている人達が数多く存在するということを意味している。

学校でSDGsに関する学習をする中、私に最も強く訴えてきたのは、こうした発展途上国の水事情である。例えば、エチオピアでは、川で排泄をし、その川の水を使って洗濯までしているそうだ。それだけでなく、それを飲み水としても使っているのが、衛生状態は悪い。その結果、感染症を引き起こし、命を落とす子供が毎年三十万人もいるとのことだ。私の想像を超えた現実はその想像だけではなかった。子供は飲み水を確保するために、一日中水を汲みに行かなければならないのである。そのせいで、子供達は学校で学ぶこともできない。水問題は、衛生面の問題だけでなく、子供の未来をも奪うことにつながっていることにショックを受

けた。

私達は毎日、水道から無限に清潔な水が出てくると思っ

てそれを使って、元気に学校へ行く。このような生活が当たり前である

日本は、まさに「豊かな国」である。その豊かさを享受しつつ、その水

を大切に使用していきたいと、その時は思っていた。

しかし、「豊かな国」は、決して誇れるものではないということを知った。あるテレビ番組で伝えられた事実を知り、私は驚きを隠せなかった。

日本は食糧の多くを輸入に頼っている。その中でも日本国内で大量に消費されている肉は、海外の莫大な水と穀物を消費して作られていることを知ったのだ。私達の豊かな生活は、輸出国で水不足や食糧不足をもたらしている。遠い国の水問題が、急に身近なものに感じられた。それどころか、大きな悪影響を与えていることに愕然とした。

「豊かな国」である以上、私は担うべき使命があると思う。インターネットで調べた時、日本のある企業がアジア、中東、アフリカなどの水不足の地域で貢献活動をしていることを知った。日本の水道技術をそれらの地域に伝え、水道や浄水場などの施設を作っているそうだ。それにより、一日何千万トンもの真水を作り出し、生活用水や飲料用水として使われている。日本の支援により、わずかだが、水に関わる環境が整ってきていると感じる。このまま続けられれば、子供達も元気に学校に行けるようになると思うととても喜ばしい。

世界の水問題の一端は、私達にも責任がある。だからこそ、国や企業、個人で、できることから取り組むべきだと考える。それが、私達に課せられた使命だと感じる。日頃から水に感謝し、日本と世界の水問題は一直線につながっているということを中心に留め、水を大切に使用していきたい。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

あいにく

熊本県 甲佐町立甲佐中学校 三年 豊永 はる

「明日はあいにくの空模様でしょう。」

「本日はあいにくの雨の中……。」

よく天気予報や挨拶で耳にするフレーズだ。しかし、私は「あいにく」だとは思わない。

夏の暑い日、父は自宅近くの畑まで両手にバケツを持って何度も往復していた。私も手伝ったことがあるが大変な作業であった。農家の祖父母は雨が降ると、

「今日はよか雨が降った〜。」

と喜んでいた。雨は行事が中止になったり、外出することがおっくうになったりするが、雨を待ち、喜んでいる人もいる。私は雨が大好きだということではないが、何となく、「安心する」というのが私の正確な答えだ。

水も雨も農家にとってなくてはならない。川よりも低い場所の田畑に水を入れることは容易に想像することができるが、川よりも高い場所や斜面の土地ではどうなっているのかという疑問を持ち、調べることにした。

近所の場所では「上井手用水」と呼ばれる用水路がある。大きな川にせきを作り、上井手用水へと水は流れ小さな用水路や水道橋などを通って田畑へと水を引き込んでいる。他にもため池や水車、山都町にある円形分水など様々な工夫があり、水を安定して利用するための先人たちの知恵を知ることができた。水を有効に利用することは弥生時代の稲作が始まった時から取り組んでいることがわかっていく。人々にとって安心した生活を送るために水や雨がどれだけ大事かということを知った。

しかし、雨が嫌いになる出来事が起きた。昨年、熊本豪雨だ。テ

レビで流れる衝撃的な映像に大きなショックを受けた。何度も訪れたことがある人吉球磨地域。あの球磨川や万江川、川辺川が恐ろしい姿に変わった。人吉に住む友人が心配で、無事であることがわかった時は涙がでた。父は以前、人吉に住んでいたこともあり、災害後すぐにボランティア活動に参加し、ほぼ毎週人吉に行っていた。クタクタで帰ってくる父に

「大丈夫？」

と声をかけると、

「今、行動せんといかん。」

という力強い答えが返ってきた。その後、中学校でボランティア活動の募集があり、すぐに申し込み球磨村へ行った。言葉が出なかった。その光景に「水は残酷である」と感じた。家は壊滅状態、田畑には土砂がたい積し、色々なものが流れ着いていた。そこには祖父母や父のような田畑を大事にしてきた人がいたのだろうと思ひ、一生懸命土砂と漂流物の撤去を頑張った。一緒に参加した皆の力で何とか元の姿に近いところまで整備することができた。その時の被災者の方の涙は忘れられない。「今、行動せんといかん」父の言葉を思い出した。

時に恐ろしい水。しかし大切な水。

歴史上人々は何度も災害を経験し、そのたび毎に立ち上がってきた。これからも私たちは水とうまく付き合い、安心して暮らせるための工夫をしながら生活しなければならぬ。そして、私たちにあって水は最も大切であるということを忘れず、先人たちの知恵と行動に感謝しながら日々を送っていききたい。

雨は決して「あいにく」ではない。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

「あの子達を救いたい」

愛知県

豊橋市立本郷中学校

二年

中村

光里

二〇一九年十二月に中国で見つかった新型コロナウイルスは、『大切な人』みんな大事に過ごそうと誓った『小学校生活残り一ヶ月』、人と人とのふれ合いの時間など、私達の大事なものを奪っていった。悲しみや、悔しさ、怒りを感じ、なんとなく世の中が暗くなった気がした。

第一波の緊急事態宣言が発令され、小学校と中学校をまたいだ貴重な学校生活の三カ月間を奪われ、自宅で静かに過ごす事になった。ぼんやりとテレビを眺めていると、衝撃的な光景を目の当たりにした。

私と同じ年の女の子がやせ細った体で、泣きながら、ぐったりしている赤ちゃんを抱っこしている。今も飢えや病気で多くの子供が命を落としている。水がなく何時間もかけて水を汲みに行く子供達の姿。やっと着いた水場は、茶色に濁っている。それを嬉しそうにポリタンクに汲み、また来た道を帰って行く。そんな生活を毎日送っている。当然学校にも通えていない。

近年、世界人口の約五十パーセントが水を得るのに厳しい状態にある。水資源や給水システムが整っていないために、綺麗な水が得られず、健康にも影響を及ぼしてしまうのだ。

一方私達は、蛇口をひねり、毎日何のためらいもなく綺麗な水を飲むことが出来る。あの子達がこれを見たら夢のように思うだろう。

このコロナ自粛期間中を、ただ用意された勉強をするだけではあまりにももったいないと思ったので、『日本の技術で世界を救う』というテーマで自分なりに社会科研究をすることにした。

私の家はトマトを水耕栽培している。この施設溶液栽培の技術ならどんな土地でも野菜を栽培できる。そのためには水が必要だ。ではその水をどうやって確保すれば良いのかと研究が進んでいった。

日本には海水から淡水を作り出す技術、水を安全に各家庭や施設に届ける技術、そして使用した水を安全に自然に戻す下水処理技術などがあ

り、海外でもこの技術が活躍している事を知った。

感染症などを含む病気を減らす衛生面や、農業、工業など、何においても水が必要で、その結果「水」さえ確保出来れば、あの子達を救えるだろうという考えに行き着いた。

『水の惑星』と言われる地球だが、私達の生活のために取水できる水の量は、地球に存在する水のおよそ0.000000001パーセントしかない。しかも今後の人口増加や気候変動により、世界規模で水不足になることも予想されている。

そんな貴重な水を、日本に住む私達は不自由なく使用できる環境にある。『日本の名水百選』なんていうぜい沢なものまである程、私達は豊富な水に恵まれているのだ。

このコロナ禍で日本が世界に比べて、感染者数を爆発的に増やすこともなく済んでいるのは、日本人の元々持っている綺麗な水によるものかと思う。衛生的な生活を送るには、「水」が欠かせない。手洗いがいい、掃除洗濯、何においても水が必要なのだ。

水を作り、引き、使用後の汚水を処理し、また海に戻す。水を安全に循環させる技術を日本は沢山持っている。

あの子達を救えるこの技術を、私達はもっと知っておくべきで、企業レベルではなく国同士の事業として支援していかなければならないと強く思う。

水を当たり前のようによく使用できる環境に感謝しつつ、自分達さえ良ければそれで良いとせず、『水の惑星』に住む人々が、みんなその恩恵を受けることが出来るような社会を私は作りたい。

あの子達と共に生きていく未来のために、今一度「水」について世界の国々が一緒に考え、行動していけたら良いなと思う。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

「四国四県、友情の水」

香川県 香川大学教育学部附属高松中学校 三年 溝口 真央

夕方放送される地方のニュース番組でも、今年は連日コロナ関連の報道が中心だ。しかし、私の住む香川県では例年この時期には、天気予報とセットで「早明浦ダムの貯水率」のニュースが毎日伝えられていた。これ以上貯水率が下がれば、取水制限をしなければならぬと報道されるほど、ダムの水が枯渇した年もあった。ホームセンターに行けば、渴水対策として、蛇口につける節水グッズや雨水の利用商品が陳列されており、市役所の入口には「節水にご協力ください」という横断幕まであった。香川県の水不足は、ここ数年で急におきはじめたものではなく、香川県民の水との戦いははるか昔から続いている。

日本で一番面積が小さい香川県は、ため池が一万二千以上あり日本でも三番目に多い。温暖な瀬戸内海気候は年間の降水量がとも少なく、地理的にも大きな河川がないため、慢性的な水不足にみまわれてきた。この深刻な水不足をどうにか解消しようと、昔の人は県内各地にため池を築き水の確保に力を注いできた。それでも、水不足に陥ったときは、頼みをするしかなかった。讃岐の国司を務めていた菅原道真公が、民の苦しむ姿をみて、自ら身を捧げて祈願したところ、待望の雨が三日三晩降り続いたというのは有名な話である。慈雨に喜ぶ民は、その歓喜と道真公への感謝を踊りで示した。その雨乞いの念仏踊りが今もなお、五穀豊穰を祈願するものとして、地元の滝宮天満宮で受け継がれている。

もちろん、雨乞いだけに頼ってきたわけではない。土木の技術を集結して、雨が多く降る他県から水をひいてくる香川用水を建設した。田植えの時期になると、ごうごうと音をたてて流れる水を怖いとさえ思うことがある。その水は、はるかかなた高知県の早明浦ダムから流れ出て、吉野川を下り、讃岐山脈を貫くトンネルを通り、はるばる香川まで運ばれてきている。そして、私たちの生活に欠かせない、水道用水・工業用水・農業用水として日々使われている。香川用水についていろいろと調

べると「讃岐の大動脈」と言われる理由に気づかされた。

祖父が行う米作りでは、五月から九月にかけて集中的に多くの水を使用している。五月の連休前には、田植えの準備のために代かきを行うが、その際は田んぼ一面になみなみと水が張られる。香川用水から分かれた水路に水を引き込み、田んぼとの境に祖父が手作りしたせき板を差し込むと、水は勢いよく田んぼの中へと流れていく。まだ小さかった頃、祖父について田んぼに行き、せき止められた水路に裸足で入り、膝下まで流れる冷たい水を弟とかけあつて遊んだことを鮮明に覚えている。祖父の田んぼに水がたまると、弟と二人で協力してその栓を外し、お隣さんの田んぼに水が流れていくようにしていた。上流の田んぼからだんだんと下流の田んぼへ、効率よく水をまわしていくことで、水を無駄にしない工夫がされていた。すぐに田んぼに水を引ける有難さ、偉人の技術のすばらしさ、そしてなにより水の大切さを実感した。

私たちがあたりまえに食べている米や野菜の成長には水が必要不可欠である。水がなければ食卓まで届くことはない。蛇口をひねれば水はいつでも・いくらでも出てくるので、私たちは水を使い放題のように錯覚しているが、水は枯渇する可能性がある。水も「限りある大切な資源」であることを意識して生活したい。なにより、香川用水に流れる水は、周りの県から分けていただいた「友情の水」である。一滴も無駄にすることなく大切に活用していかなくてはならないと感じた。食卓に差し込んでくる夕日を見て祖母が「明日も晴れやなあ」と言う。祖父は少し残念そうに「空梅雨やな」と言う。そんな日常を見て、今年はコロナの影響で手伝えなかつた田植えを来年は手伝おうかなと思った。

中央審査会特別賞（優秀賞）

潤う未来

鹿児島県 喜界町立喜界中学校 三年 喜禎 あさひ

周囲約四十八キロ、面積約五十七平方キロメートル、奄美大島の東方約二十五キロの位置に浮かぶ小さな島、喜界島。この、私の住む島には、地面の下に巨大なプールがある。プールと言っても、普通に想像するあのプールではない。大規模なものとしては、沖縄の宮古島に続いて国内二例目となる「地下ダム」と呼ばれるものだ。地下ダム。地下にダム。この耳慣れない言葉から、それがどういうものなのか、何のために存在しているのか、想像できるだろうか。

ある夏の日、綺麗に区画整理された畑が続く緑の大地には、熱い太陽が容赦なく照り付けていた。気付けば、ここ数日雨が一ミリも降っていない。そんな中、農道を車で走っていると、左右から勢いよくシャワーの水を浴びた。「気持ちいい」直接浴びたわけではないが、畑と畑の間に立つ幾つものスプリンクラーから噴射された水は、風に乗って高く舞い上がり、サトウキビたちは気持ちよさそうにきらきらと輝いて見えた。そう、これが、「地下ダム」から送られる農業用水なのだ。喜界島には、生活用水とは別に、島内に張りめぐらされたもう一つのパイプラインがある。私達の暮らしを守るもう一つの「命の水」だ。

喜界島は、現在でも、年間約二ミリずつ隆起している世界的にも珍しい隆起珊瑚礁の島だ。その土地の地層には特徴があり、下層に不透水層の基盤、そして、その上層を石灰岩が覆っている。石灰岩は、多孔質で透水性が良かったため、降水は速やかに地下に浸透し、海に流れ出ていく。そのため、喜界島には河川がない。その上、梅雨と台風の時期に集中して雨が降るといふ気候の特徴もあり、年間約二千ミリ以上の降水量があるにもかかわらず、島の農業は、度々水不足に悩まされてきた。

そう、そこで、地下を通して海に流れ出る水を、地下に止水壁を造ることによって、石灰岩層に貯えておくという仕組みが、この「地下ダム」というわけだ。

「そろそろ、第二地下ダムの建設が始まるよ。これからは、更に、島の農業は発展するよ。」父が嬉しそうにそう話した。私の家は黒糖焼酎の造り酒屋だが、その原料になるサトウキビの栽培も行っている。しかも、有機栽培だ。そんなこともあり、私も小さい頃から農業について多少の興味を持っていた。「雨待ち農業」地下ダムがなかった頃の苦労や収量の不安定な状態を、島の人はよくそう言っていたが、今は、日照りが続いても、トラックで大量の水を運んで畑に撒く必要がなくなり、仕事はだいぶ楽になった。そして、計画的に、更に挑戦する農業へと繋がっている。

私の父はよくこんな話をする。「豊かになった大事な水資源を活かしていくために、もつと環境にも目を向けていかなくてはいけない。」水は、生物が生きるために何より大事なものだ。私は、最近思うことがある。地域の奉仕作業に参加した時の街の中や海岸、畑の畦道などのゴミの量がとても気になるのだ。空き缶、ペットボトル、お菓子の袋、そしてタバコの吸い殻など、土地を汚しているそれらは、地下ダムの水に何らかの影響を与えてはいないのだろうか。理科や社会科の授業で学んできたように、世の中は循環している。健康な心と体を維持するためには、安全な食べ物が必要で、その食べ物は、安全な土地から作られ、それには安全な水が必要になる。せつかく、地下ダムによって良い環境が整うのだから、私達はそれを十分に活かしていくような行動をしなくてはならないと思う。

さあ、いよいよ「第二地下ダム」の建設が始まる。私は、中学生の立場から、持続可能な島、社会を作るために、今、自分にできることを考えていきたい。この喜界島が、永遠に豊かな水に溢れ、動植物も、私達人間の生活も命も、すべてが潤い続ける未来のために。